原著

Travelbee における「共感」「同感」「ラポート」の再検討
－ロゴセラピー的観点から－

永島　聡[1)]

Reconsideration of Travelbee's "empathy","sympathy"and"rapport"
－ From a viewpoint of Logotherapy －

Satoru NAGASHIMA[1)]

要　旨

Joyce Travelbee の理論は Victor E.Frankl のロゴセラピーから影響を受けていることはよく知られている。しかしながら、彼女の理論には Frankl からの直接的引用が少ないのも事実である。拙稿においては、特に Travelbee の「共感」と「同感」について、ロゴセラピー的観点から再考したい。

キーワード：共感、同感、ラポート、生きる意味、意味への意志

ABSTRACT

It is well known that Joyce Travelbee's theory of nursing is influenced by Victor E. Frankl's Logotherapy. However, in fact, her theory has few direct quotations from Frankl's. In this article, I try to reexamine her concepts, particularly"empathy"and"sympathy", from a viewpoint of Logotherapy.

Key words : empathy,　sympathy,　rapport,　meaning of life,　will to meaning

1）教育イノベーション機構（保健科学部看護学科）

１．はじめに

Joyce Travelbee は自身の看護理論を、精神医学者でありかつ哲学者である Victor E.Frankl の思想をベースに打ち立てたことはよく知られている。しかしながら、具体的に Frankl のどのような考え方をどのように取り入れているか、彼女の表現の中に明示されているわけではない。例えば「意味への意志」「精神的無意識」「創造価値」等、彼の用語を日常的に直接使っているわけでもない。

Travelbee の理論は、Frankl の思想を十分咀嚼、消化し、彼女自身の言葉で文章化されているものである、と言うこともできよう。しかし、Frankl からの影響を考慮しつつ Travelbee について検討することは、彼女の理論への理解をより深めることに資すると考えられるのではないか。拙稿では、特に「共感」と「同感」について、これらの概念を Frankl 的観点から裏打ちすることを試みたい。

２．共感（empathy）と同感（sympathy）とラポート（rapport）

Travelbee の共感と同感に関しては、以前 C.R.Rogers における同様の概念と比較検討しつつ述べた[1)]。その際の内容を踏まえ、あらためてここで触れる。

看護師と患者との二者関係における成熟過程を Travelbee は５段階に分けている。共感と同感はそれぞれ３段階目と４段階目になる。二者の関係性が大きく肯定的に深化し得る段階であるので、特にここで取り上げる。

一般的に日本語としての「共感」という言葉は、他者に感情移入しその気持ちを優しく思い遣りつつ理解する、という印象を持ちやすいのではないだろうか。一方 Travelbee の共感は、「所与の時点での他人の内的体験を、表面的行動をこえて悟り、正確に感ずる」[2)]ことであると定義される。共感とは、相手の内的世界を意識的に把握するのみなのであり、その相手を何とか援助したい、という欲求はまだ抱いていない。逆に、ある他者の内的世界を把握し、その知識に基づきその他者を陥れてやろう、とすることの前段階でもあり得る。

例えば、いわゆる「振り込め詐欺」のケースについて考えてみる。ある犯人が高齢者に電話をかけ、だますための話術を展開する。犯人はその被害者の言葉を聞きながら、「ああ、このおばあさんは自分のことを息子だと信じ込んでいる。そしてひどく心配して、息子の助けになってやりたいと思っているんだなあ」と把握した場合、この犯人は Travelbee 的には共感していることになる。そしてその共感を利用して、この後高齢者から大金を奪い取ろうとするのである。

さらに、この被害者が銀行に行くためにタクシーに乗ったとする。車内で彼女は犯人と携帯電話で会話をしている。被害者の言葉を聞いている運転士が、次のように思ったとする。「この人はもしかしたら振り込め詐欺の被害に遭いかかっているのではないか。多分電話の向こう側の声を息子のものだと思い込み、ひどく心配して、息子の助けになってやりたいと思っているんだなあ。でも、実は詐欺じゃないかもしれない。自分の判断が間違っていたとしたら恥ずかしい。ここは余計なことは言わない方がいいかも。でも本当に詐欺だったらどうしよう…」。気をもんでいるうちに銀行に着いてしまい、結局被害者であろう人に対して「おばあさん、それって振り込め詐欺じゃないですか。相手の言葉を信じたらいけない。振り込んだらいけない。警察に行きましょう」等具体的な言葉がけがなかったとしても、この運転士も Travelbee 的にはやはり共感していることになるのである。ただし、何の助けにもなっていない。

共感の段階においては、それをする側とされる側は、それぞれ離れて立ちつつともにある、というあり方であるが、同感の段階に至って、その距離がなくなる、ということである。そして、相手の苦悩に心を動かされ、その感情に参加し、救済したい、という願望を持つのである。これらは共感の段階にはなかったことである。そしてこの同感は看護師から患者に対して、言語だけでなくむしろ一瞥、仕草、

サービスのやり方等、非言語的に伝えられるものである。援助したい、という願望を持つに至った看護師は、直接的に患者に巻き込まれて行く。巻き込まれて関与（involvement）しながら、ケアは成立していく。

ここで同じ対人援助場面である心理療法について考える。例えばもしカウンセラーがパーソナリティ障害の傾向があるクライアントに心理面で巻き込まれ、かつそのことが十分に検討されない場合、それはセラピーの進展に資さないと判断されることはいまだ少なくないであろう。明確な治療構造のもと、「枠」に守られながらのセラピーが、クライアントに対して安定したケアを提供できる、ということである。しかしながら Travelbee にとっては、看護師は患者に巻き込まれなければならない。そこから初めて信頼関係が生まれ得るのである。距離のない関係性の中で両者は、お互いが「看護師」であり「患者」であるのではなく、それぞれがその役割を超えた独自の人間であることがわかる。患者は次のように経験する。すなわち、自分が患者だから看護師がケアしてくれるのではなく、看護師は自分を独自な人間として関心を持ってくれている、と感じるのである。

同感の段階において芽生えたこの関係性は、次の段階つまり最終段階である「ラポート（rapport)」における「人間対人間の関係」へと発展する。互いに巻き込まれながらそこへ至った両者は、「看護師」とか「患者」とかいったステレオタイプが打ち砕かれ、一人の人間と一人の人間になる。ここにおいて、ステレオタイプを維持するために使われていたエネルギーは、建設的な方向に用いることができる。

この人間対人間の関係が、Travelbee にとって真の関係であり、真の看護がここに成立するという。そのため看護師は、患者やその家族が看護師に対して持っているステレオタイプを超越させることを意図しなければならず、看護師自身も患者やその家族へのステレオタイプから超越することを目指さなければならないのである。

３．Frankl の人生観

Frankl の思想は、わかりやすく体系的に明示されているわけではない。様々な文献に様々な考えがちりばめられている。種々の箇所で同様の見解が繰り返し述べられていたりもする。これ以降では特に『それでも人生にイエスと言う』[3)] や『識られざる神』[4)] にて述べられている見解からまとめてみる。

Frankl にとってそもそも「人生」とは何か。人間は、お金も地位も名声も、あるに越したことはないであろうし、できればそれを獲得したいであろう。そして、いろいろ獲得して幸せになりたいであろうし、どうやったら幸せを獲得できるだろうか、と問いがちであろう。最終的に人間が人生について考えるとき、通常「我々は人生から何を期待できるか」という観点から問う。このように問いの立て方は自己を世界の中心に置く。

しかし Frankl は、これは人間にとって本来的なあり方ではないと言う。彼は強制収容所にて次のような体験をしている。ある収容者から話を聞いたのであるが、彼は米軍が「３月30日」に助けに来てくれる夢を見たと言う。そしてその解放してもらう日を待ちわびるのであるが、発疹チフスに罹り、「３月30日」に意識を失い、その翌日に亡くなった。

さらにこのような体験もしている。彼は精神科医として収容所内で診療を行っていたのであるが、あるとき「もはや人生から何ものも期待できない」と訴える二人の自殺願望患者と出会った。Frankl は彼らに生きる意味を取り戻させることに成功した。そのうちの一人には、愛する家族が外国にいる。もう一人には、これから科学者として完成させなければならない著作がある。自分ではない、自分を待っている大切なものがあって、それのために生きなければならない、ということに気づかせることができたのである。

前の収容者は、米軍の救援を獲得することを求めていた。後の二人の患者は、自分以外の人や物事に対して何ができるか、自分以外の人や物事が何を求めているのか、という姿勢であった。前者は世界の

中心に自分を置いて、世界から何かを獲得したいと意識する、といった自分に対する内向きのベクトルが働いている。一方後者は、自己超越的に他者を志向するような、自分から出て行く外向きのベクトルが働いている。

Frankl が過ごした数か所の強制収容所は、特に過酷な状況の施設であった。それら収容所における生活からは、得られるものはほとんどない。食事は満足のいくものではあり得ず、十分な衣服も与えられず、寒い建物に住まわされ、極限状況の中で強制労働が続く。このような環境のもと、「我々は人生から何を期待できるか」という基本姿勢では、結局何も得られない人間には生きる意味などない、ということになってしまう。

Frankl はここに、「コペルニクス的転回」の必要性を説く。人間にとって、「我々は人生から何を期待できるか」ではなく、180° 真逆の「人生は我々から何を期待しているのか」という姿勢が本来的なものなのである。

我々は問う側ではなくて、問われる側なのである。今ここで、その都度その都度、人生から何かを問われている。そしてそれに答える「責任」が我々にはある。もう二度と来ない貴重な今ここを体験することは、すなわちそのかけがえのなさ、唯一性の実現である。そこで我々はどのような態度を取るか、それは我々の自由意志のもとにある。自分自身で主体的に態度決定するのである。特に何もしない、という選択肢を取ることも可能であるし、徹底的に巻き込まれて行くという態度を取ってもいい。最終決定は我々に任されているのである。そしてもちろん、その自由性のもとに決定した態度には、自由意志であったからこそ、責任性も生じてくる。

では我々はどのように答えることができるのか。例えば先の科学者が無事帰還できた際を考える。彼が自分の仕事に無意識的に夢中になり、忘我的にその仕事に献身し専心する時、仕事になりきっている時、彼が仕事と一体になっているとき、Frankl 的に本来的なあり方であり、生きる意味を充足することができる。この時、彼は無意識的なのであるが、Frankl は無意識の力を信じている。

もし彼が何かを意図して仕事をする場合、どうであろうか。仕事の成功を目標として強く意識し続け、ある一定の成果を獲得できたとする。その際、一時的な満足は得られ目標は達成されるであろうが、やがて欲求不満となり、新たな成功の獲得を求めるのではないだろうか。しかしながら、仕事の取っかかりは意図的であろうが、仕事を志向し仕事の中に忘我的に夢中になり、仕事になりきっている瞬間、彼は自らの存在の意味を全身で無意識的に経験し、価値を実現している、とFrankl的には言える。そして、成果の獲得はあくまでも結果としての副産物である。これは結果であり目標ではないのである。

もう一人、彼の帰宅を外国で待っている家族のいる人についても、同様のことが言える。終戦後出会うことができたとする。その家族を志向し愛している瞬間、やはり忘我的に専心しその家族のために献身していると言える。何らかの見返りを求めているわけではない。目標として求めてはいないが、結果として家族の幸せを、無意識的ではあるかも知れないが全身で体験できるかもしれないし、その際、人生の意味を感じないということはないであろう。もし自分向きのベクトルで何か肯定的なものの獲得を求めているのであれば、そこから得られる満足はやはり一時的であろう。

そして彼らに限らず、あらゆる人間は意味への意志を持っている。そして人生の意味を充足するには、人間に本来的な無意識的あり方が必要になってくるのである。

4．共感、同感、ラポートは Frankl 的にどう説明できるか

先に述べたように、共感とは他者に対する意識的な把握にとどまり、まだケアが始まっていない段階であると言える。そして共感的に理解する者と共感的に理解されるものとに分裂している。この言わば主客が分裂したままの状態は、Frankl 的には本来的なあり方ではない。

Travelbee の共感は、共感する者とされる者にあ

る程度共通する経験があって可能となる。例えば近親者と死別した経験のない看護学生が、最近近親者と死別した担当患者の気持ちを共感することを考える。この学生がもしかつて飼っていた犬が死んだという経験をしたことがある場合、看護教官は学生がペットの犬を失ったときの気持ちを思いだして、担当患者の思いを共感するように促すのである。

しかしながらそのように再び想起した飼い犬への気持ちは、あくまでもその看護学生の気持ちである。「私が以前ペットの犬を失って、悲しかった。その私の気持ちと担当患者のそれとは共通性がある」と意識的に認識するわけである。ここには、今ここでの何とも言えない患者の深い思い、たった一人のその人だけが今ここで感じている、という一回性や唯一性といったものは、そこでは全身で体験しようがない。看護学生が患者の中に入り込んで専心しているわけでもない。あくまで看護学生としての「私」が担当患者が「悲しい」と感じているかもしれないと意識的に推測しているだけである。私が患者の情報の獲得を欲しているのであり、私を世界の中心に置いて自分向きのベクトルを設定している。自己中心的であり、相手を理解して私自身が肯定的な気分を持ちたいと思っているのかもしれない。いわば自分が楽になることを目標にしているのかもしれない。Frankl 的には本来、ケアの副産物として結果的に肯定的な気分になるものである。

これに対して、同感とラポートはどうか。同感の段階に来て看護師は、患者の感情に参加したい、苦悩を救いたいと思う。そして両者の距離はなくなると Travelbee は言う。

ここで看護師は患者を志向し、無意識的に患者のケアへと専心し、患者をケアしてしまっているとする。自分は看護師であるという意識もなくなっている瞬間を経験し、ケアになりきっているとすれば、これは Frankl 的には人間の本来的なあり方にあると思われる。そして距離を持って相手を知的に理解する共感と異なり、両者の距離がなくなっている、ということについても、これは患者を自己超越的に志向し、看護師自身の全存在で患者を経験している、と言えるのであろう。

今ここで、生身の患者と相対して、自分は何を問われているか。何をすべきなのか。それに答える瞬間、無意識的にケアしてしまう瞬間、この経験は唯一のかけがえのないものとならざるを得ない。すなわち、看護師であるとか患者であるとか、抽象的なものではなく、極めて具体的な一個の人間と一個の人間になってしまうのであろう。そして Travelbee はこれを「巻き込まれる」と表現しているのではないだろうか。いずれにせよ、ここで Travelbee の言う人間対人間の関係が成立し、看護師とか患者とかいったステレオタイプは粉砕される。

さらに Travelbee 自身は述べていないが、Frankl 的には、ここで生きる意味が結果として実現されると考えられる。看護師は決して、よい看護師になってやろうと意図していたわけではないのであるが、ふと気がつけば、充足感を抱いているのではないか。

患者を目の前にして、どのような態度を取るか。問われている看護師には答える責任がある。それは看護師の自由意志のもとにある。ケアに巻き込まれる選択をするか、あくまで従来の看護師の枠内でのみ接するか、あるいはこれはないであろうが何もしないか、無意識的に態度決定するにせよ、どう決断するかは看護師の自由である。また看護師の自由だからこそ、その結果の責任は看護師にあることになる。このような Frankl 的自由性・責任性のもとにあるということを、巻き込まれている、と表現することができるかもしれない。いずれにしても、同感からラポートにかけて、Frankl の言う本来的なあり方が増してきているように思える。

5．おわりに

Frankl の影響を受けているが直接的にそれを十分説明していない Travelbee の理論について、特に共感、同感、ラポートに関して、Frankl の思想で裏打ちすることを試みてみた。特に同感からラポートにかけては、Frankl 的観点から眺めることはで

きそうに感じた。共感については、Travelbee はそれを意識的な把握のレベルにとどめているのであるが、どうであろうか。先に述べた、振り込め詐欺の犯人による悪事を働くための共感と、タクシー運転士による結局具体的助力のなかった中での共感と、対人援助職によるクライアントのための共感とを、同じものとして考えることははたして適切なのであろうか。疑問が残る。さらに、そもそも巻き込まれるとはどのようなことなのか。例えば病理の深い患者との関係性に巻き込まれて行くことを Frankl 的にどう考えればいいのか。これらについては今後の検討課題としたい。

文献

1）永島聡：「Travelbeeの『共感』とRogersの『共感』――看護教育における『共感』に関する再検討」、53-63頁、神戸常盤大学紀要、2015

2）Travelbee,J.：『人間対人間の看護』長谷川浩・藤枝知子共訳、200頁、医学書院、1974

3）Frankl,V.E.：『それでも人生にイエスと言う』山田邦男・松田美佳共訳、春秋社、1993

4）Frankl,V.E.：『識られざる神』佐野利勝・木村敏訳、みすず書房、2002